

トマス・アクィナス著 信仰箇条と教会の諸秘蹟について ——パレルモの大司教宛

増 田 三 彦

597. 貴方の愛が私に要請いたしましたのは、信仰箇条と教会の秘蹟について貴方に何かを記憶のために簡潔な仕方ですべて書き送ることでした。それも、これらのものをめぐって提起され得る疑問と共にであります。しかしながら、神学者たちの研究は、すべて、信仰箇条と教会の秘蹟をめぐる疑念に関するものでありますから、もしも貴方の要請に十分に答えようとするならば、神学全体に属する困難な諸問題を要約的に述べねばならなくなるでしょう。これが如何ほど面倒であるかを思慮深い貴方はお気づきのことと存じます。ですから、差し当り、信仰箇条と教会の諸秘蹟を区分した上で、その各々に関して如何なる誤謬を避けるべきかを示すことで充分でありましょう。

〔1〕信仰箇条について【以下において敬語を使用しない】

598. 第一にあなたが知るべきこと、それはキリスト教信仰全体が神性とキリストの人間性とに関わるということである。だからキリストは人間の声で語って次のように言われた。「あなたは神を信じている。私をも信じなさい」(『ヨハネ福音書』14:1)。ところで、このいずれをも、一部の人は六つの箇条に、一部の人は七つの箇条に区分する。こうして、総ての箇条は、或る人々によれば十二であると、また或る人々によれば十四であると、言われる。ところで、神性の信仰に関わる最初の六つの箇条を、人々は次のように区分している。すなわち、神性をめぐって考察されるべき三つのことがある。それは、つまり、神の本質の一性、パルソナの三性、それに神の力の結果である。

599. 第一の箇条は、我々が神の本質の一性を信じなくてはならないということである。『申命記』6:4に言う。「聞け、イスラエルよ、あなたの神なる主は一なる神である」。ところで、この箇条に関して、避けるべき多くの誤謬

が見出される。

第一は複数の神々があるとする異邦人乃至は異教徒の誤謬である。彼らに反対する仕方で、『出エジプト記』20:3に、「あなたたちは私の前に異なる神々を持つてはならない」と言われている。

第二はマニ教徒の誤謬である。彼らは二つの第一根源があって、その一つからは総ての善いものが、一つからは総ての悪いものが由来したと主張する。彼らに反対する仕方で、『イザヤ書』45:6において「私は主である。他の神はない。光を造り、闇を創造し、平和を造り、悪を創造する。私が主であり、これら総てのを行う」と言われている。ところで、神が悪を創造すると言われているのは、神が、自らの被造物のうちに罪科の悪があるのを見て、自らの正義に基づいて罰の悪を科すからである。

第三は神人同形論者の誤謬である。彼らは、一なる神を主張するのではあるが、神が物的なものであり、人間の身体のように形造られていると言うのである。彼らに反対する仕方で、『ヨハネ福音書』4:24に「神は霊である」と言われており、また『イザヤ書』40:18に「お前たちは神を誰に似せ、如何なる像に仕立てたのか」と言われている。

第四はエピクロス派の誤謬である。彼らは言う。神は人間的な物事について知識も摂理も持たないと。彼らに反対する仕方で、『ペトロ前書』5:7において、「あなたたちの総ての心遣いを神に委ねなさい。神はあなたたちのことを心にかけておられるからである」と言われている。

第五は異教の一部の哲学者の誤謬である。彼らは言う。神は全能ではなく、自然的な仕方で生じることのみをなし得るのであると。彼らに反対する仕方で、『詩編』113:3において、「主は、およそ欲し給うことを総てなし給うた」と言われている。従って、これら総ての者たちは、或いは神的本質の一性を貶め、或いは完全性を貶める者である。だから、これら総ての者たちに対して、信経の中に、「私は全能の父なる唯一の神を信じる」という言葉が置かれているのである。

600. 第二の箇条は、一つの本質のうちに三つの神的ペルソナがあるということである。『ヨハネ第一書翰』5:7に言う。「天において証言する三つのものがあり、それは父と御言葉と聖霊である。そしてこれら三者は一つである」【クレメンヌ版ヴルガタなどにはこの句がある】。この箇条に反対する多くの誤謬

がある。

第一はサベリウスの誤謬であり、彼は一つの本質を主張したが、ペルソナの三性を否定し、一つのペルソナが時としては「父」と呼ばれ、時としては「子」と呼ばれ、時としては「聖霊」と呼ばれるのだと言った。【サベリウス（サベリオス）は3世紀の人。220年頃活躍。単一神論乃至は様態論を唱えたとされる。これは、神的存在は一であって、御子は御父から区別された実在を有しないと主張する。】

第二はアリウスの誤謬である。彼は三つのペルソナを主張したが、本質の一性を否定した。彼が言うには、御子は御父と別の実体であり、創造されたものであり、御父より小さい者であり、御父と同等な者でも共に永遠な者でもない。却って、存在しなかった後で存在し始めたのである。【アリウス（アレイオス）(c.260-336)はアレクサンドリアの司祭。従属説を唱えた。】これら二つの誤謬に反対する仕方、主は『ヨハネ福音書』10:30において、「私と父、我々一つである」と言っておられる。まことに、アウグスティヌスが言うように、「『一つ』と言っておられることはあなたをアリウスから解放する。『我々は』と言っておられることはあなたを多くの仕方、サベリウスから解放する」【『ヨハネ福音書講解』36, n. 9】のである。

第三はエウノミウスの誤謬である。彼は御子が御父に似ていないと主張した。【エウノミオスは4世紀の人。非相似説を唱えた。】彼に反対する仕方、『コロサイ書』1:15において、「御子は見えない神の像である」と言われている。

第四はマケドニウスの誤謬である。【マケドニオスは4世紀の人。聖霊は御父から発出するのではなく、御子の被造物であるとする。】彼は聖霊が被造物であると言った。彼に反対する仕方、『コリント後書』3:17において、「主は霊である」と言われている。

第五はギリシャ人たちの誤謬である。彼らは、聖霊が御父から発出するが、御子からは発出しないとされた。彼らに反対する仕方、『ヨハネ福音書』14:26において、「父が私の名においてお遣わしになる聖霊なる弁護者」と言われている。何故なら、すなわち、御父は聖霊を、いわば御子の霊として、そして御子から発出するものとして、派遣するからである。また『ヨハネ福音書』16:14に言う。「彼は私に栄光あらしめる。私から受けるからである」。そしてこれら総ての誤謬に対して、信経において、「私は御父なる神とその御子を信じ

る。御子は生まれたが造られたのではなく、御父と同一実体である。また聖霊を信じる。彼は主であり、生かす方である。彼は御父と御子から発出した」と言われている。

601. 神性に関する他の四つの箇条は神の力の結果に関わる。第三の箇条であるその第一は、自然本性の存在への、諸事物の創造に関わる。「神が語られるとこれらのものは成った」(『詩編』148:5)とあるとおりである。

これらの箇条について第一に誤ったのはデモクリトスとエピクロスである。彼らの主張によれば、世界の質料も、世界の構成も、神によるのではない。世界は、彼らが諸事物の根源であると見做した不可分な諸物体【原子】の合流により、偶然に出来たのである。彼らに反対する仕方で、『詩編』32:6において、「主の言葉によって天は固められた」と言われている。つまり、これは永遠の理念によるのであって、偶然によるのではないと。

第二の誤謬はプラトンとアナクサゴラスのものである。彼らの主張によれば、世界は神によって造られたのではあるが、先在する質料から造られたのである。彼らに反対する仕方で、『詩編』32:9において、「主が命じられると、これらのものは造られた」と言われている。つまり、無から造られたのである。

第三はアリストテレスの誤謬である。アリストテレスは、世界は神によって、しかし永遠の昔に創造されたと主張した。これに反対する仕方で、『創世記』1:1に、「初めに神は天と地を創造された」と言われている。

第四はマニ教徒たちの誤謬である。彼らの主張によると、神は諸々の見えないものの創造者であるが、諸々の見えるものは悪魔によって造られたのだと言った。彼らに反対する仕方で、『ヘブライ書』11:3において、「私たちは信仰によって、世界が神の言葉によって組み立てられ、諸々の見えないものから諸々の見えるものが出来たことを悟る」と言われている。

第五は、魔術士シモンとその弟子メナンドロス、それに彼らに従う他の多くの異端者の誤謬である。彼らは世界の創造を神にではなく、神の天使たちに帰するのである【これはグノーシス説である】。彼らに反対する仕方で、使徒は『使徒行録』17:24において、「世界とそこにある総てのものを造られた神は、この天地の主であられるから、云々」と言われている。

第六は、神は自分自身で世界を統率するのではなく、自らに従属する諸々の権能を通じて統率するのだとする者たちの誤謬である。彼らに反対する仕方

で、『ヨブ記』34:13において、「神は他の誰を地の上に立てたか。或いは、自ら造った世界の上に誰を置いたか」と言われている。またこれらの誤謬に対して、信経の中に、「天と地、見えるものと見えないものの総ての造り主——或いは創造者——を」と言われている。

602. また、第四の箇条は恩寵の諸結果に関わる。恩寵を通じて我々は、神によって義化されるのである。『ロマ書』3:24に言う。「私たちは彼の恩寵によって無償で義とされる」。「彼の」とは「神の」である。そして、この箇条の下に含まれるのは、教会の総ての秘蹟、そしておよそ教会の一性と聖霊の賜物と人々の義に属することがらのすべてである。教会の諸秘蹟については後で論じるゆえ、差し当り諸秘蹟について論じるのは差し控え、この箇条に敵対する他の誤謬を説明しよう。

その第一はケリントスとエピオンとナザレ派の誤謬である。彼らが言ったところによると、キリストの恩寵は、ひとが割礼や、律法の他の掟を守るのでなければ、救いのために充分なものでない。彼らに反対する仕方、『ロマ書』3:28において、「人間は律法の業とは無関係に信仰によって義とされると、私たちは考える」と言われている。

第二はドナトゥス派の誤謬である。彼らは、キリストの恩寵がただアフリカにのみとどまったと主張したのである。何故なら、他の世界全体がカルタゴの司教カエキリアヌス——彼らが断罪していたところの——と交流していたからである。このような主張によって、彼らは教会の一性を否定していたのである。彼らに反対する仕方、『コロサイ書』3:11に、キリスト・イエスにおいては「異邦人もユダヤ人も、割礼と無割礼も、未開人もスキタイ人も、奴隷も自由人もなく、キリストが総てであり総ての者のうちにおられる」と言われている。

第三はペラギウス派の誤謬である。彼らは、第一に、原罪が子供たちのうちにあることを否定した。これに反対する仕方、使徒は『ロマ書』5:12において、「一人の人間を通じて罪がこの世に入り込んだ」と述べている。また『詩編』50:7に言う。「見よ、私は不正のうちに身ごもられた」。彼らは、第二に、人間にとって、善き業の始めは自分自身によるが、成就是神によると言う。これに反対する仕方、使徒は『フィリピ書』2:13において、「私たちのうちに働いて、ご好意のままに望ませ成し遂げさせ給うのは神である」と述べてい

る。彼らは、第三に、恩寵が人々に与えられるのは、人間の功績に基づくと言う。これに反対する仕方、使徒は『ロマ書』11:6において、「もしも恩寵によるのなら、もはや業によるのではない。さもなくば、恩寵はもはや恩寵でなくなる」と言う。

第四の誤謬はオリゲネスの誤謬である。彼の主張によれば、総ての魂は天使たちと共に創造されたのであり、彼らがそこでなしたことの相異に基づいて、一部の人々は神によって恩寵を通じて呼ばれ、一部の人々は不信仰のうちにとどまった。これに反対する仕方、使徒は『ロマ書』9:11において、「いまだ生れず、何の善も悪も行わないときに、『兄は弟に仕えるであろう』と言われた」と言うのである。

第五は、カタフリガエ派の、即ち、モンタヌスとプリスカ（プリスキラ）とマクシミラの誤謬である【これらは2世紀後半に活躍した人々】。彼らが言うには、預言者たちはいわば憑かれた者なのであって、聖霊によって語ったのではない。彼らに反対する仕方、『ペトロ後書』1:21において、「かつて預言が告げられたのは、人間の意志によるのではなく、神の聖なる人々が聖霊に靈感を受けて語ったのである」と言われている。彼らは、また、聖霊の到来の約束は使徒たちにおいて成就したのではなく、彼らにおいて成就したのだと言う。これに反することが『使徒行録』第2章に述べられている。

第六はケルドン【2世紀の人】の誤謬である。彼が先ず、「律法と預言者の神はキリストの父でも善い神でもなく、義なる神である。これに対し、キリストの神は善なる神である」と言った。マニ教徒が、律法を否認して彼に従ったのである。彼らに反対する仕方、『ロマ書』7:12に、「律法は聖なるものであり、掟も聖なるものであり、正しく、善なるものである」と言われている。また、『ロマ書』1:2に、「この福音を神は、聖書の中で、既にその預言者たちを通じて約束しておられたのであり、それは、その御子に関するものである」と言われている。

第七は、生の完全性に属する一部のことがらが救いの必要事に属すると主張する者たちの誤謬である。すなわち、彼らのうちの一部は、不遜きわまることに、自らを使徒的な者と称したが、結婚し自分の財産を所有する者たちは救いの希望を持ってないと主張したのである。他の者たちは、即ちタティアヌス派の連中は、「肉を食わず、肉を嫌悪し」、『テモテ前書』4:3における使徒の言葉の如く、「信仰者が感謝を以て食べるようにと神が創造された食物を断つこと

を」教えたのである。エウキタイ派【祈祷派・メッサリア派】は、連続して祈るのでなければ人々は救われることができないと言う。これは、『ルカ福音書』18:1における主の言葉、「ひるむことなく、常に祈らなくてはならない」、によっている。これは、アウグスティヌスによれば、「如何なる日にも、一定の祈る時間が欠けてはならない」との意味である。また、他のパッサロリンキタエ派と呼ばれた人々は、「沈黙に大いに努め、自分の手を鼻と口に当てる」人々である。「パッサロス」は、ギリシャ語で杭を、「リンコス」は鼻を意味する。また或る者たちは、人は常に裸足で歩くのでなければ救われることができないと言った。彼らの総てに反対する仕方で、使徒は『コリント前書』10:22において、「すべてのことが私に許されている。しかしすべてのことが益になるのではない」と言っている。この言葉から理解されるのは、若干のことが、聖なる人々によって、いわば有益なこととして援用されることができるとは、だからといって反対のことが許されないことになるわけではない、ということである。

第八の誤謬は、逆に、完全性の業を信仰者の一般的な生に優先させるべきではないと言う者たちの誤謬である。例えば、ヨヴィニアヌス【4世紀の異端的修道者】は、童貞性・処女性が婚姻よりも優れたものであるとされるべきではないと主張した。これに対して、『コリント前書』7:38において、「自分の娘に婚姻を結ばせる者は善いことをし、結ばせない者は一層善いことをする」と言われている。ヴィギランティウス【c.370-c.406. スペインの司祭】も同様に、富を所有する人々の状態を、キリストのために受け入れた貧しさの状態と並ぶものとした。彼に反対する仕方で、主は『マタイ福音書』19:21において、「もしもあなたが完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に与えなさい」と言っておられる。

第九の誤謬は、自由意思を否定する者たちの誤謬である。例えば、或る者たちは、悪しき創造による魂たちは罪を犯さずにはおられないと言って、自由意思を否定したのである。これに反対する仕方で、『ヨハネ第一書翰』19:21において、「私がこれをあなたたちに書き送るのは、あなたたちが罪を犯さないためである」と言われている。

第十の誤謬は、プリスキリアニスタエ派【プリスキリアヌスは4世紀のスペイン人】と数学者・占星家の誤謬である。彼らは、「人々は運命を司る星に結ばれている」と、こうして、つまり、彼らのなす業は星々の必然性に従属して

いる、と言った。これに反対する仕方、『エレミヤ書』10:2において、「異邦人が恐れる天の徴を恐れるな」と言われている。

第十一の誤謬は、神の恩寵と愛 *caritas* を持つ人々は罪を犯すことができないと言い、こうして、或る時に罪を犯す者は愛を持っていなかったのだと主張する人々の誤謬である。彼らに反対する仕方、『黙示録』2:4-5に、「お前はかつての愛を放棄した。どこから墮ちたかを思い出せ」と言われている。

第十二の誤謬は、神の教会によって普遍的な仕方、定められたことを遵守すべきではないと言う者たちの誤謬である。例えば、アエリアニ派【アエリウスは4世紀のエンクラト派】がそれであり、彼らは「規定による断食は儀式に従って行われるべきではなく、各人が欲するときに断食すべきである。律法の下にあると見られないように」と言う。また、テッサレスカイデカティタエ派、即ち、十四日派も同様である。彼らは（ニサン月の）十四日目に、それが週のどの日にあっても、復活祭を祝うべきだと言う。そして教会によって定められたことについても同様な論が成立することになる。こうした総ての誤謬に反対する仕方、使徒信経において、「聖なるカトリック（公）教会、聖者たちの交わり、罪の赦しを」と言われている。また、教父たちの信経は、「聖霊は預言者たちを通じて語った。そして私は、一なる、聖なる、普遍的な、使徒的な教会を信じる。罪の赦しのための一なる洗礼を宣言する」と言われている。

603. 第五の箇条は、死者たちの復活に関わる。これについて、『コリント前書』15:51において、「私たちは皆復活する」と言われている。これに反対する誤謬も多い。

その第一はヴァレンティヌス【ヴァレンティヌスはエジプト出身のグノーシス派神学者。2世紀の人】の誤謬である。彼は肉の復活を否定したのであり、多くの異端者が彼に従った。彼に反対する仕方、『コリント前書』15:12において、「キリストは死者のうちから復活したと述べ伝えられているのに、死者たちの復活はないと言う者があなたたちのうちにあるのはどうしたことか」と言われている。

第二はヒメナイとフィルトの誤謬である。使徒は彼らに対して、「彼らは真理から外れ、復活はすでに起ったと言っている」(『テモテ後書』2:18)と述べている。これは、或いは、彼らが霊的復活しか信じなかったことによるものであり、或いは、キリストと共に復活した以外の人々は復活しないであろうと言ってい

たことによるのである。

第三の誤謬は若干の現代の異端者たちの誤謬である。彼らが言うには、復活はあるであろうが、同じ身体が復活するのではなく、魂が取り戻すのは或る天体である。彼らに反対する仕方、使徒は『コリント前書』15:53において、「この可滅的なものが不滅なものを着、この可死的なものが不死なるものを着ることになる」と述べている。

第四は、コンスタンティノポリスの総大司教エウテュキウス【512—582】の誤謬である。彼は復活における我々の身体が空気や風に似たものとなるであろうと主張した。これはグレゴリウスが『道徳論』第14巻（第56章）において語っている如くである。これに反対する仕方、主は、復活後、自らの身体を弟子たちに、触るようにと差し出されたのである。『ルカ福音書』24:39において、主は「触ってよく見なさい」と言っておられる。とはいえ、使徒は『フィリピ書』3:21において、キリストは「私たちの卑しい体を御自分の栄光ある体にかたどらせてくださる」と述べている。

第五の誤謬は、人間の身体が復活において霊に変わると言う者たちの誤謬である。彼らに反対する仕方、『ルカ福音書』24:39に、「霊は、私が持っているのをあなたたちが見ているような肉も骨も持っていない」と言われている。

第六の誤謬はケリントス【グノーシス派】の誤謬である。彼は復活後、キリストの地上的王国が千年続くとおしゃべりをした。そこでは、肉的な人々が、欲望と欲情の快楽を有することになると。彼に反対する仕方、『マタイ福音書』22:30において、「復活のときには、めとることも嫁ぐこともない」と言われている。

また或る者たちは「死者たちの復活の後、世は今と同様な状態にとどまるであろう」と言った。彼らに反対する仕方、『黙示録』21:1において、「私は新しい天と新しい地を見た」と言われている。そして使徒は、『ロマ書』8:21において、「被造物自体も、滅びへの奴隷状態から自由になされ、神の子供たちの栄光の自由に至るであろう」と述べている。そして、これら総ての誤謬に反対して、「肉の復活を」と言われ、別の信経には、「私は死者たちの復活を待望する」と言われるのである。

604. 第六の箇条は神性の最後の結果に関わる。それは善人たちへの褒賞と

悪人たちへの罰である。『詩編』61:13に言う。「あなたは各人にその業に応じて報いてくださる」。そして、この点に関しても、多くの誤謬があった。

その第一は、魂は「アラビア人が主張したように身体と共に死ぬ、或いはまたゼノンが言ったようにしばらくしてから死ぬ」と言った者たちの誤謬である。これは『教会教義論』に述べられている。【トマス『対異教徒大全』第2巻第79章 n.1611を参照】これに反対する仕方で、使徒は『フィリピ書』1:23において、「私は死んでキリストと共にあることを願う」と言っている。また『黙示録』6:9に言う。「私は神の祭壇の下に、神の言葉のために死んだ人々の魂を見た」。

第二はオリゲネスの誤謬である。彼の主張によると、悪霊どもや断罪された人々は、再び浄化されて栄光へと回帰することができるのであり、また聖なる天使たちと至福なる人々が再び悪へと導かれることができる。これは『マタイ福音書』25:46における主の権威ある言葉に反する。いわく、「これらの人々は永遠の刑罰に至り、義人たちは永遠の生命に至るであろう」。

第三は、善人たちの総ての褒賞と悪人たちの総ての罰はそれぞれ等しいと言う者たちの誤謬である。この第一の点に反対する仕方で、『コリント前書』15:41において、「星と星は明るさに違いがあるように、死者たちの復活も同様である」と言われている。第二の点に反対する仕方で、『マタイ福音書』11:22において、「裁きの日において、ツロとシドンのほうが、お前たちよりも軽い罰ですむ」と言われている。

第四は、悪人たちの魂が死後ただちに地獄に落ちるのではなく、また聖者たちの若干の魂は審判以前の日に樂園に入らない、と言う者たちの誤謬である。彼らに反対する仕方で、『ルカ福音書』16:22において、「この金持は死んで葬られ、陰府に至った」と言われている。そして、『コリント後書』5:1において、「もしも私たちの地上の家であるこの幕屋が壊れるならば、手で作られたものではない、天に備えられた永遠の家を持つであろう」と言われている。

第五は、死後における魂たちの煉獄——即ち、愛に欠けるところがあって、浄化されるべき何かを有する者たちの煉獄——はないと言う者たちの誤謬である。彼らに反対する仕方で、『コリント前書』3:12以下に言う。「もしもひとがこの土台——即ち、愛を通じて働く信仰という土台——の上に、木、草、藁で建築するなら、損害を受ける。しかし、彼は救われるであろう。ただし、いわば火を通るようにしてである」。これらの誤謬に対して、信経において「永

遠の生命を、アメン」と、或いは「来るべき世の生命を」と言われている。

605. 神性の信仰をめぐる七つの箇条を指摘する他の人々は、それらを次のように区分する。第一は本質の一性に関するもの、第二は御父のペルソナに関するもの、第三は御子のペルソナに関するもの、第四は聖霊のペルソナに関するもの、第五は創造の結果に関するもの、第六は義化の結果に関するもの、第七は褒賞の結果に関するもので、彼らはこの第七のうちに復活と永遠の生命を含めている。こうして、彼らは今述べたの六つの箇条の第二を三つに分け、しかし第五と第六を一つにまとめるので、彼らによると七つの箇条があることになる。またどのように区分されるかは、信仰の真理にとって、或いは誤謬の回避のために、重要なことではない。

606. 今や残るのは、キリストの人間性に関わる諸箇条について考察することである。これに関しても、或る人々は箇条を六つに区別する。

その第一は、キリストの受胎と誕生に関するものである。『イザヤ書』7:14に言う。またこれは『マタイ福音書』1:23に引用されている。いわく、「見よ、処女が身ごもり、男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれるであろう」。そして、この点をめぐって多くの誤謬があった。

その第一は、キリストが純粋な人間であり、常にあったのではなく、処女マリアから起源を得たのだと言う者たちの誤謬である【「純粋な人間」乃至「単なる人間」とは、神性を持たず人間性のみを持つ人間】。これは、カルポクラテス【2世紀のグノーシス主義者】とケリントスとエピオンとサモサタのパウロ【アンティオキアの司教、3世紀】とフォティヌス【4世紀の人、シルミウムの司教】の誤謬である。彼らに反対する仕方で、『ロマ書』9:5において、「肉によればキリストも彼らから出た。キリストは総てのものの上にある、世々に祝されるべき神である。アメン」と言われている。

第二は、マニ教徒の誤謬である。彼らが言うには、キリストは真の身体を持たず、幻影的身体を持っていたのである。これに反対する仕方で、主は『ルカ福音書』24:37において、「狼狽し、恐れて、亡霊を見ていると思った」弟子たちの誤りを非難しておられる。また、『マタイ福音書』14:26に言う。「湖上を歩いておられるイエスを見て、弟子たちは混乱し、『幽霊だ』と恐れ叫んだ」。彼らの考えを取り除くため、主は言われた。「安心しなさい。私だ。恐れ

るな」と。

第三は、ヴァレンティヌスの誤謬である。彼が言うには、キリストは天体を取ったのであり、処女（マリア）からは何も受けなかった。却って、彼女からは如何なる肉も受け取ることなく、いわば川が水路を通るように彼女を通過したのである。これに反対する仕方では、『ガラテヤ書』4:4において、「神はその御子を、女から生まれた者として遣わされた」と言われている。

第四は、アポリナリウス【アポリナリオス、c.300—c.390。シリアのラオディキア生れ。第一コンスタンティノーブル公会議（381）において断罪された】の誤謬であり、彼が言ったところによれば、御言葉の何かが肉へと転化乃至は変化したのであり、マリアの肉から肉を受けることはなかった。『ヨハネ福音書』1:14に、「御言葉は肉となった」と言われているからである。この句を彼は、御言葉が肉へと転化したという意味に解したのである。これに反対する仕方では、同所において直ちに、「彼は我々のうちに住んだ」と附言されている。然るに、もしも肉へと転化したのだとすれば、我々の本性のうちに十全な仕方では住まなかったことになろう【トマス『ヨハネ福音書註解』n.173を参照】。だから、「御言葉は肉となった」は、「御言葉は人間となった」との意味に解されるべきである。聖書において、「肉」はしばしばこの意味で用いられているのである。『イザヤ書』40:5に言う。「総ての肉は等しくこれを見るであろう。主の口が語られたからである」。

第五の誤謬はアリウスの誤謬である。彼の主張によれば、キリストは人間の魂を持たず、魂の代りに御言葉があったのである。これに反対する仕方では、『ヨハネ福音書』10:18に、「誰も私から私の魂を取り去りはしない。私がそれを捨て、再び取るのである」と言われている。

第六の誤謬は、アポリナリウスの誤謬である。彼は既述の証言や他の証言によって、キリストが人間の魂を持っていたことを説得されて、キリストは人間の知性を持っておらず、神の御言葉が彼の知性の代りをしていたと主張した。これに反対する仕方では、主は自分が人間であると『ヨハネ福音書』8:40において宣言しておられる。いわく、「あなたたちは、あなたたちに真理を語った人間である私を殺そうとしている」。理性的魂が欠けていたとすれば、彼は人間でなかったであろう。

第七の誤謬は、エウテュケスの誤謬である。彼は、キリストにおいて神性と人間性から複合された一つの本性があるとした。これに反対する仕方では、使徒

は『フィリピ書』2:6において、キリストは「神の形においてありながら、僕の形を取られた」と言っており、こうして明らかに、キリストにおいて神の本性と人間の本性という二つの本性を区別している。

第八は、キリストのうちに一つの知、働き、意志を主張する単意説派の誤謬である。彼らに反対する仕方で、主は『マタイ福音書』26:39において、「私が意志するとおりにではなく、あなたの意志されるとおりになりますように」と言っておられる。ここに明らかに、キリストのうちに、一方では人間的意志が、他方では御父と御子に共通な神的意志が措定されている。

第九の誤謬はネストリウス【ネストリオス、c.381—c.451。コンスタンティノポリスの司教。マリアを「テオトコス（神の母）」と呼ぶことを否定し、「クリストコス（キリストの母）」と呼ぶべきだとした】のものである。彼はキリストが完全な神でありかつ完全な人間であると言ったのであるが、それでいて、神のペルソナと人のペルソナは別々のものであると言った。そして、神と人の合一はキリストの一つのペルソナにおいて生じたのではなく、単に恩寵の内住に基づいてのみ生じたと言った。こうして、至福なる処女が神の母であることを否定し、彼女は人間キリストの母であると言ったのである。これに反対する仕方で、『ルカ福音書』1:35において、「あなたからお生まれになる方は神の子と呼ばれます」と言われている。

第十の誤謬は、カルポクラテス【2世紀のグノーシス主義者】の誤謬である。彼は人間キリストが両親から生まれたと主張したと言われる。これに対して、『マタイ福音書』1:18において、「同居する前に、聖霊によって身ごもっていることが明かになった」と言われている。

第十一の誤謬は、ヘルウィディウス【4世紀の人、ミラノの信徒】の誤謬である。彼は言う。至福なる処女がキリストを生んだ後、彼女はヨセフによって多くの子供を生んだと。これに反対する仕方で、『エゼキエル書』44:2において、「この門は閉ざされ開かれなであろう。男がそこを通ることはないであろう。何故なら、イスラエルの神なる主がそこから入られたからである」。そしてこれら総ての誤謬に対して、使徒信経に言う。「彼は」、即ち神の子は、「聖霊によって宿り、処女マリアから生まれた」。教父たちの信経に言う。「彼は我々人間のため、我々の救いのため、天から下り、聖霊によって処女マリアから受肉し、人間となった」。

607. 第二の箇条は、キリストの受難と死去に関するものである。これは主御自身が『マタイ福音書』20:18-19において予告されたことに基づく。いわく、「見よ、私たちはエルサレムに上る。人の子は祭司長たちや律法学者たちに渡されるであろう。彼らは死刑を宣告し、異邦人に渡すであろう。それは彼を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである」。

この箇条に関して、第一にマニ教徒の誤謬がある。彼らは、ちょうどキリストの身体が幻影的なものであると主張したように、キリストの受難が真実起ったのではなく、幻影のうちに起ったのだと考えたのである。これに反対する仕方、『イザヤ書』53:4に言う。「まことに、彼は私たちの病を担った」。また言う。「彼は羊のように屠殺場に導かれた」【テキストは『使徒行録』8:32から取られている、Cfr. 『イザヤ書』53:7】。これは『使徒行録』8:32に引用されている。

第二は、ガイアヌス【ガイアヌスは5世紀の人、アレクサンドリアの総大司教、単性論者】の誤謬である。彼は、キリストにおいて一つの本性を指定したが、それは不滅で不死なる本性である。これに反対する仕方、『ペトロ前書』3:18において、「キリストは私たちの罪のために一度死に給うた」と言われている。また、これらの誤謬に反対して、信経の中に、「十字架につけられ、死して葬られた」という言葉が置かれている。

609. 第三の箇条は陰府への降下に関するものである。実際、我々は、キリストの魂が、身体は墓に横たわったまま、陰府に下ったことを信じるのである。『エフェソ書』4:9に言う。「彼は先ず地の低い部分に下った」と。だから、信経において、「陰府に下った」と言われるのである。これは、キリストは自分自身で陰府に下ったのではないと主張した一部の者たちの考えと反対である。それでいて、ペトロは『使徒行録』2:31において、「彼は陰府に捨て置かれぬ」と述べている。

608. 第四の箇条は、キリストの復活に関するものである。これはキリスト自身が、『マタイ福音書』20:19において「三日目に復活する」と言われたことに基づく。

この箇条に関して第一に誤ったのはケリントスである。その主張によれば、キリストは復活したのではなく復活するであろう。これに反対する仕方、『コ

リント前書』15:4において、キリストは「聖書に従って三日目に復活した」と言われている。

第二の誤謬は、オリゲネスのものとしてされる誤謬であり、悪霊どもの救いのためにキリストが再び受難されるであろうというものである。これに反対する仕方、『ロマ書』6:9において、「死者たちのうちから復活したキリストはもはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないであろう」と言われている。そしてこれらの誤謬に対して、信経に「三日目に死者たちのうちから復活した」と言われている。

610. 第五の箇条はキリストの昇天に関するものである。これについて、キリスト自身が、『ヨハネ福音書』20:17において、「私は私の父、あなたたちの父のもとに上る」と言っておられる。これに関して、セレウキアニ派【グノーシス派の一派】は誤ったのであって、彼らは救い主が肉において父なる神の右に座していることを否定し、彼は肉を脱ぎ捨てて太陽の中に置いたと言ったのである。これに反対する仕方、『マルコ福音書』16:19において、「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上り、神の右に座られた」と言われている。だから、信経に、「天に昇り、父なる神の右に座しておられる」と言われているのである。

611. 第六の箇条は、審判のための到来に関するものである。これについて、主御自身が、『マタイ福音書』25:31において、「人の子は、自らの威光を帯びて総ての天使たちを従えて来るとき、その威光の座に着くであろう」と言っておられる。またペトロは『使徒行録』10:42において言う。この方は「生ける者と死せる者の審判者として神によって立てられた方である」と。つまり、善人と悪人の、或いは、既に死んでいる者とキリストの到来のときに生きているのが見出される者の審判者として、である。この点に関して、『ペトロ後書』3:3-4において次のように言われている者たちは誤ったのである。いわく、「終りの日に、自分の欲望に従って歩んでいる嘲弄する者たちが来て、『彼の約束或いは到来はどうなったのか』と言うであろう」。彼らに反対する仕方、『ヨブ記』19:29において、「剣の面から逃げよ。剣は不正の報復者だからである。裁きがあることを知れ」と言われている。だから、信経において、「そこから、生ける者と死せる者を裁くために来られるであろう」と言われているのである。

る。

ところで、(キリストの) 人間性の七つの箇条を数える人々は、第一の箇条を二つに区分して、キリストの受胎と誕生を別々の箇条の下に置くのである。

後書き

翻訳のテキストとして使用したのは、レオ版トマス・アクィナス全集第42巻、Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia Iussu Leonis XIII P. M. Edita Tomus XLII, Roma, 1979 に収められている、De Articulis Fidei et Ecclesiae Sacramentis ad Archiepiscopum Panormitanum であり、マリエッチ版トマス・アクィナス神学小論集第1巻所収のテキスト、S. Thomae Aquinatis, opuscula Theologica, Vol. 1, De re Dogmatica et Morali, cura et studio Fr. Raymundi A. Verardo O. P., Marietti, torino/Roma 1954, pp. 141-147 を参照した。訳したのは、枚数の制限により、前半部分である。

1261 から 1270 までパレルモの大司教であった Leonardo に宛てられたものと言われる。著作年代もこの間ということになる。

J. -P. Torrell, *Initiation à saint Thomas d'Aquin. Sa personne et son oeuvre* (Paris, 1993), pp.182-183、レオ版の H. -F. Dondaine の *Préface* を参照。

マリエッチ版の番号を付した。(608 と 609 の順番が逆になっているのは、マリエッチ版の順序が入れ替わっているからである。)

聖書の章節はラテン語ヴルガタ訳の数字である。聖書の節の指示は 16 世紀に始まるものでありトマスの時代には付されていないものであるが、入れておいた。

【 】の中に若干の説明を置いた。不統一ゆえ省略しようとも思ったが、そのままにしておいた。出典箇所などは、レオ版の脚注を見られたし。

この小論においてトマスは信仰箇条を、神性に関するもの六つ、キリストの人間性に関するもの六つに分けている。前者の第一の、神の本質の一性に属する箇条の誤謬を五つ、第二の神のペルソナの三性に関する箇条に属する誤謬を五つ、第三の事物の創造に関する箇条に属する誤謬を六つ、第四の恩寵の結果

なる人間の義化に関する箇条に属する誤謬を十二、第五の死者の復活に関する箇条に属する誤謬を七つ、第六の善人の褒賞と悪人の罰に関わる箇条に属する誤謬を五つ挙げ、後者の第一の、キリストの受胎と誕生に関する箇条に属する誤謬を十一、受難と復活に関する箇条に属する誤謬を二つ、陰府下りに関する箇条に属する誤謬を一つ、キリストの復活に関する箇条に属する誤謬を二つ、裁きのためのキリストの到来に関する箇条に属する誤謬を一つ挙げて、都合五十七の誤謬を簡潔に説明している。箇条の分け方について、『神学大全』II-II, q.1, a.8 c.を参照。また、アエリアニ派、アナクサゴラス、アポリナリウス、アラビア人、アリウス、アリストテレス、エウキタイ派(メサリア派・祈祷派)、エウテュキウス、エウテュケス、エウノミウス、エビオン、エピクロス、エピクロス派、オリゲネス、カタフリガエ派、カルポクラテス、ガイアヌス、ギリシャ人、ケリントス、ケルドン、サベリウス、サモサタのパウロ、セレウキアニ派、ゼノン、タティアノス派、テッサレスカイデカティタエ派、即ち十四日派、デモクリトス、ドナトゥス派、ナザレ派、ネストリウス、パッサロリンキタエ派、ヒメナイ、フィレト、フォティヌス、プラトン、プリスカ(プリスキラ)、プリスキリアニスタエ派、ヘルウィディウス、ペラギウス派、マクシミラ、マケドニウス、マニ教徒、メナンドロス、モンタヌス、ヨヴィニアヌス、ヴァレンティヌス、ヴィギランティウス、魔術士シモン、若干の現代の異端者たち、神人同形論者、数学者・占星家、単意説派といった名が挙げられている。

『神学大全』の、特に三位一体とキリストについて論じた個所や、ヨハネ福音書の註解、パウロ書翰の註解などに、様々な異端や誤謬について言及されている。この小論には多くの異端・誤謬がまとめて挙げられているので、参考になるであろうと思われる。